

# こども こころ からだ

223

## 仲間とつながり育ち合う

自然とあそぶ青空ようちえん「森の子教室」

主宰 田畑祐子さん



「森の子は子どもたちが高校生、大学生になっても気軽に顔を出せる場」と話す田畑祐子さん。

## 「“森の子”は、大人みんな 子どもたちと一緒に支え、育てていくコミュニティー」

「自分の根っこをつくる時期がいちばん大事だと思っただけです」

地元の津雲公園（吹田市千里ニュータウン）を拠点に、青空ようちえん「森の子教室」を主宰する田畑祐子さん（愛称ゆうこさん）。中学校での教師時代に荒れる子どもたちと向き合い、幼児期の育ち方がもっとも大切だと感じて始めた取り組みです。教室は子どもたちのたくましい成長を目の当たりにした母親たちの口コミで徐々に広がり、すでに18年。これまでに90人が巣立っていきました。

約20人の少人数で幼児保育を続ける森の子教室。年少児の募集は前年の6月ごろから始まります。まず体験会に参加してもらい、その後、複数人での説明会や質問会が続きます。

「実際に子どもたちと森の中で過ごして、いいところも悪いところもすべてを感じてもらいます。質問会を複数人にするのは、自分の気づかないところもほかの人が聞いてくれるから。納得いかないことも突っ込んで聞いてもらい、森の子が大切にしていることを伝えます」

一般の幼稚園と根本的に違うのが、保護者と主宰者であるゆうこさんとの関係です。入会を決める前に「自分の子育てのパートナーとして私を選ぶかどうか。教育方針から相性まで考えて、よく吟味してください」と伝えるそう。組織ではないため、保護者との信頼関係がなければ成り立ちません。

「森の子の子どもたちは、3歳であつても意志と責任を持って生活しています。だから子どもにはそういう生き方をさせたいけれど、親である自分はいくら嫌でもは困るんです。親自身がこういう生き方をしたいかどうかが選んでほしいんです」

なぜなら子どもは親の生きる姿を見て育つから。それだけに、ゆうこさんと保護者

との関係はかなり密なものに。名前も互いにニックネームで呼び合います。

「みんな自分の子どもだけでなく、よその子も見合う関係。まん中にいる子どもたちを周りの大人たちが囲み、一緒に支えて育てていくコミュニティーです」

もっとも大事にしているのは、どんな時でもどんな話でもできる関係であること。懇談会などの交流もいつでも持っているのが前提で、日程の段取りなどは保護者が担うこともあります。

### 大学生になっても つながり合う子どもたち

ゆうこさんは元小学校・中学校美術教師。中学の美術教師時代に荒れる子どもたちを直面し、幼児期の子育ての大事さを痛感した一人です。閃々としていた時に自身の子育てでも始まり、自分ができることから取り組もうと、始めたのが自宅を開放しての「土曜日のアトリエ自由学校」。枠にとらわれない造形を中心に、どんなことにもチャレンジする教室です。それをさらに深め、生活の基盤となる日常を子どもたちとともにしたいと、10年目に森の子教室をスタートしました。

「本当に大切だと思うことを貫くには、自分が全責任を負わないとできない。そう思うてのスタートでしたが、集う人たちが納得して口コミで広がり、今ではOBや保護者たちとともに生きる仲間です」

学校教育については「今も以前も教師たちが子どもを引っ張り、いかにして成功させるかが教師の手腕になっている。そこに非常に大きな疑問を感じたことが原点にある」と話すゆうこさん。自然の中で学ぶリスクについて聞いてみました。

「園庭の道具は安全で当たり前ですが、木登りは1歩1歩自分で確かめないと危険です。枝先に葉っぱがついてない枝は朽ちてい

て危ないし、柿のようにサクッと折れやすい木もある。細い枝でもしなな折れにくい木もある。それらを子どもたちは足の裏や指先、体の感覚で学んでいくんです」

また、平坦で整備された園庭を走って養われる運動能力ではなく、枯れ葉の下に穴ぼこがあるような坂を滑ったり駆け下りたりしながら神経を研ぎすませ、自分で感じ考えての運動能力を身につけていく森の子の子どもたち。

「子どもたちは小さい失敗を何度も経験して、そのたびに自分で判断し、身の守り方を学ぶのでケガにつながることは少ない。危険というリスクよりも、そこで得るメリッットのほうが大きいからこそ、このスタイルを取っている」と言う、ゆうこさん。保護者には「危険なフィールドであることを前提に、親としての責任で選んでください」と話しているそうです。

毎年秋になると、津雲公園のグラウンドを貸し切って開かれる「運動会」。保護者やおじいちゃん、おばあちゃんばかりか、OBやOBの家族まで約200人もが集まります。揺るがないつながりのかたさが伝わってくるそうです。

「森の子の宝はOBとの関係です。彼らにとつて森の子は、幼児期だけの思い出ではなく、今も現在進行形。いつでも気軽に顔を出せる場であり、誇りと愛着を持ち続けます。現役時代に重なっていない先輩と後輩の間にも共有があり、未来に向けてもつむぎ続けている。森の子生活の始まりは、終わりのない関係のスタートです」

■田畑祐子（たはたゆうこ）  
大阪府吹田市生まれ。中学校美術教師、小学校教師を経て、1988年から豊中市の自宅を週末開放して「アトリエ自由学校」を自身の子育てとともにスタート。10年後の98年からは、日常も子どもたちとともにという思いから「森の子教室」を始める。現在は拠点で「開だまりの家」に移し、「アトリエ自由学校」も継続する。